

新しい詩の声 2024  
(第8回)・作品

〈最優秀賞〉

## 角 朋美

### 湖の箱

意識をなくした初夏の午後

倒れた診察室ではなく

わたしは湖に沈もうとしていた

あまりにも透明な光がほのかに青く反射する

湖面に息が泡となつてのぼつていった

太陽が丸くなる頃合い

消える息 呼吸の必要がなくなつた

水面と水底がわからなくなる

消える音 耳の蝸牛は眠つた

有機から無機へと近づくと冷たさは

軽やかに質量を奪う

沈む 落ちる 浮く

底のやわらかな土に背中が触れたとたん

これから起こるすべてが頭に流れ込んできたので

わたしが壊れないように

未来が損なわれないように

生きる意味を箱詰めにしていった

窮屈そうに身じろぎして

中身が小刻みに震えている

箱 箱が脳からあふれて目の前を覆いつくす

嵩がわたしを湖面へと押し上げてゆく

浮く 支えられる 飛び出す

息が苦しくなつて 吸い込んだ水は咳に変わる

病室で目覚めたわたしに

気づいた看護師が走り去る

母が泣いていたが

わたしは湖の箱を想つた

足許でまだ未来を宿している青

〈優秀賞〉

いのうえ あき

## 象が居る川

その川がどこから始まったのかわかりません  
誰も気づかないうちにどこかで小さな落下があり  
何度か伏流水になり、気が付いたときには  
象が一頭、その水を飲んでいたのです

乾燥警報が繰り返され  
無造作に並べられた積み木のようなアパート群は  
日々の濁った色や臭いを窓から吐いています  
夕方帰途につく乾ききったひとびとの眼は  
砂の穴に沈んでいくようです

私の部屋の古い壁紙にも川の通過跡があります  
濡れた草の匂いが漂いはじめ  
やわらかな生きものの足音とともに

またきつと通過するように

壁紙の向こうの訥々とした語りにも耳をすませ  
水の記憶の奥を辿っていくと

大気の色は澄んできて

あおい花々の色は濃くなって

伏流水の音がかすかに響いています

その川の始まりは不明です

もう忘れさられた誰かの部屋の壁紙に

水滴が滲んできて、水のおい

壁紙に縞模様様が輪のように広がりはじめ

さわ さわ さわ

さわ さわ さわ

通過がはじまります

誰も気づかないうちにちいさな落下があり

あさになって、どこから、と尋ねる人もなく

気がついたときには

象の親と子がいて

音をたてながらその水を飲んでいたのです

〈優秀賞〉

## 黒田 ナオ

### 穴

穴の中には暗闇があつて

楽しい暗闇

怪しい暗闇

生暖かくてぞくぞくする

わたしは庭に飛び出して

穴を掘る

鼻歌を歌いながら

小判でも埋まってるのか

なんて男が言っている

ビール片手に

テレビ見ながら

そんなのは無視して

穴を掘る

どんだんどんだん

穴を掘る

穴の中で眠る

夜空を見上げながら眠る

猫もやって来て一緒に眠る

明日はもっともっと

掘り続けよう

〈優秀賞〉

# 竹之内 稔

Oto ri

朝 五時

聴こえない 音がする

ことっ ことり

新聞は もう やめたんだよ

この部屋へ配りに来る

配達員は もういない

四年前 更地になった実家も

阪神淡路大震災で 潰れた

母の美容室でも ずっとして

いたんだ この音

ことっ ことり

昼過ぎ図書館に行くと 新聞を

一字 一字 丁寧読んでいる

老人たち なぜか 老女はいな

い 昔は霞んで見える字をみん

な凝視するのだと思って いた

ことっ

退職した僕も いつのまにか

たくさんの新聞の 重なった時間の

束を愛おしそうに重ねて 見始める

はッ とした

文字とともに 立ち上がる時間と

立ちすくむ Heiwa 社会から

立ち止まらない世界へと響く oto

ことッ

止めてくれない 残り時間の息吹

に転調して 聴こえた気がしたから

幽かな

ことッ

の 轉りのように

り

ことッ

ああ 透明な配達員が

生真面目に配る

Oto

り

ろ しき 早朝

## 受賞のことば・受賞者略歴

●最優秀賞

角 朋美すみ ともみ

### 〈受賞の言葉〉

この度は第8回「新しい詩の声」最優秀賞に選出いただき、身の引き締まる思いです。

千葉県に生まれ、東京都で育ち、埼玉県で友人とのルームシェアを経験し、和歌山県在住の現在に至るまで、日本語に苦手意識をもつて生きてきました。母語はたしかに日本語。それでも幼少期は私の伝えたい言葉がわかるのは祖母だけという有り様で、ずっと第二外国語の感覚を持っていません。

2歳で重篤な小児喘息を患い、成人しても完治しなかったため、通院時間から同年代の方よりも人と触れ合う機会が少ないうえに短いのが、ネックなのでしよう。

7歳の折、さまざまな人的エラーが重なり、意

識不明の重体になりました。「湖の箱」では生死をさまよっていた際の出来事を当時、感じたとおりに表現しました。

私はいわゆる「うっかり生き返ってしまった人」です。子どもながらに「私、死んだな」と倒れる際には客観的に思いましたし、実際に危ないという診断でした。

湖をみて帰ってきてからすぐ、そしてその後しばらくのあいだ現実に現実感がありませんでした。そういった複雑な気持ちをも「わたしは湖の箱を想った」という行に込めています。いまでもたまにそういった感覚に襲われることがあります。

帰らない人が多くいる中で問われるのは、なぜ生き返ったのか。なぜ私である必要があったのか。〈足許でまだ未来を宿している青〉を考え続けなければなりません。

さまざまに損なわれた体、いろいろな感じる心をすべて人に伝えることは不可能に近いです。そう自覚しつつも、詩を書き続けるのは、先立つ私だけの言語を忘れたくないという表出です。みんな

など違うから、同じ言葉を話せないから、一緒に  
いられない人だから。そのすべてが私の第一言語  
を否定する理由にはなりえないのです。

「湖の箱」を選考委員全員の方に推していただ  
けたのは望外の喜びです。それだけで心をあたた  
めて歩いていけると思います。ありがとうございます  
ました。

#### 〈略歴〉

1988年千葉県柏市生まれ 2014年日本大  
学大学院芸術学研究所修士課程修了 2024年  
第1詩集『透明な遠くへ』上梓予定 参加詩誌「潮  
流詩派」「ココア共和国」「カフェオレ広場」

#### ●優秀賞

##### いのうえあき

##### 〈受賞の言葉〉

この度は、優秀賞に選んでいただきまして、あ  
りがとうございました。

私が詩のような言葉を初めて意識したのは、高  
校生の時でした。同じ通学路を毎日通りながら、

なぜかある時、突然、花や樹やそばを流れる川の  
水の輝きを強く感じて、離れ難く思った時でした。  
人は誰でも、生きていく中で様々な出来事に出  
会い、そこに立ち尽くしてしまう事があるもので  
す。そんな自分と向き合おうと葛藤し、詩として  
書いたものがどんなに稚拙な言葉であっても、自  
身そのもののような、また他人のもののような、  
そんな詩の言葉の隙間を覗くと、目の前の現実と  
は少し異なる景色が見えて、いつも驚き、安らぎ  
ました。

私は文学だけでなく、絵画もとても好きです。  
絵の前に立つと、作品の世界に吸い込まれるよう  
に強く魅了されてしまうのですが、その感覚や感  
性が見る人にもたらず直接性とでもいうものに比  
して、言葉を介して伝わってくる詩の面白さや難  
しさとの違いをいつも不思議に思ったりします。

現在、月に一度、詩の合評会をしています。参  
加者の年齢も環境も様々で、関心の対象も、異な  
りますので、友人の詩であっても、詩のコメント  
に悩むことがあります。読書には、特に詩には、

読者の想像力が不可欠と言われるように、直ちに作者の世界観を受け止めることが、特に私のような者には難しい面もあります。そしてまた、他人からみて、私の詩に対しても同じ事が言えると思います。

言葉で書かれる詩の場合、感性もその表現方法も様々であることを、私はそのまま現実の多様性、人間の持つ深さだと、最近考えるようになりました。詩に関わることで、やっと豊かさの意味に触れたのかもしれない。

まだまだ未熟な作品ばかりですが、今回、思いがけず受賞できました事を励みとさせていただき、今後も詩作を続けていきたいと思えます。

#### 〈略歴〉

兵庫県生まれ。大阪在住。同志社大学大学院英米文学修士課程修了。英語教師。第1詩集『紡錘形の虫』2020年出版（書肆山田）。日本現代詩人会会員。兵庫県現代詩協会会員。

#### ●優秀賞

くろだ  
黒田ナオ

#### 〈受賞の言葉〉

日本詩人クラブ「新しい詩の声」優秀賞をどうもありがとうございます。この賞のこと、初めてその名前を見て、なんだかとてもわくわくする言葉だと思いました。だからそんな「新しい詩の声」のひとつとして、私の言葉を選んでいただけことは、とても嬉しく、また光栄なことだと思っています。

わたしは、子供の手が離れた五十代になって初めて、神戸のカルチャーセンターに通い詩を書き始めました。書くのが初めてなら、詩を読むのも初めてで、中原中也、萩原朔太郎などという人の言葉にも初めて触れました。だから始めはどんな風にかきつぱりわからず、いいなと思う詩をノートに丸写ししてしていました。

もともとどこかで、今までとは違う新しい世界に飛び込んでみたいと思っていました。だから現実の自分とは全く違うペンネームをつけて、どち

らかという目には見えない世界について書いてみようと思いました。詩に込めた気持ちは、もちろん現実生活から出ているのですが、詩のなかでは、その向こうにあるもうひとつの何かを表現することができると、とても楽しく、まるで遊園地にいるような気分になって書いていました。

ところがそれから十何年かの時が過ぎて、この頃私は、今まで書いてきた世界に少し限界のようなものを感じています。なんていうか、その世界のもうひとつ奥にある暗くて深い得体のしれない何かを、見たり聞いたり表現してみたいと思いはじめたのです。

この「新しい詩の声」という言葉が、私にとつて特別新鮮で輝いているように感じられたのも、きっとそのことがあったからだと思います。だから私は、この受賞を機に、これからはもつともつと深い世界に飛び込んで行けるといいなと楽しみにしています。

## 〈略歴〉

神戸在住。詩集は『夜鯨を待って』（私家版）『昼の夢夜の国』（濔標）『ぼとんぼとーんと音がする』（土曜美術社出版販売）。同人誌は「どうるかまら」「凧」に参加しています。

## ●優秀賞

たけのうち  
みのる  
竹之内 稔

## 〈受賞の言葉〉

若き日、大学のゼミの教授は村上隆彦先生（筆名・笹原常与）。『權』の同人でもあった村上先生は生まれて初めて見る、生きた本物の詩人だった。伺った神戸のご自宅での柳原義達の鴉像とともに眩しく魅了された。

二十代半ば、神戸の某有名詩人の教室を初受講した際、提出作品を酷く叩かれ、散々な経験をして以後、自分が詩を書く発想はほぼ封印した。まさか自分に詩が書けるようになるとは思わぬまま幾十年も過ごした。

それが8年前、『渡辺玄英詩集』を読んだ時のことだ。手に入っていた小説を書くスキルで、自

分にも詩が書けるのではないか、と思いつく。以来、精進を重ね、今に至る。

その精進も寄り道だらけの中で、ようやくたどり着いた文学畑の試行錯誤で終始する。

あの詩の教室での経験がトラウマになったのであろう。油彩、デッサン、彫塑、絵本、アートアニメーションと美術関係ばかりに熱中した時期が続く。同時に大学通信教育にもはまり、その学習歴は20年以上。東洋大学通信で芥川龍之介の卒論を書き、旧・京都造形芸術大学の通信ではたつぷりと文芸創作のイロハの勉強をした。今も放送大学の学部生を続けている。当然、京阪神の通える範囲の詩の教室は全て網羅した。オンライン開催のもの然り。短歌・川柳・俳句、もちろん小説・童話とありとある文学教室の門を叩いていた。

気がつくくと、息を吐くように詩の言葉を紡いでいた。詩を書かない自分の姿はもう想像できない。今は、小池昌代先生からの「もっと言葉を少なく」の教えを常に意識しているものの、つい書きすぎの悪癖がある。

今年度は小説へ邁進しようと決意した矢先の、今回の受賞であった。正直、ことの唐突さに、驚き、疑い、戸惑ったままでいる。

さて、審査委員の皆様、この度は映えある賞にお選び頂いて、誠にありがとうございます。第2詩集を作る勇気を頂戴致しました。

#### 〈略歴〉

1962年、神戸市生まれ。教員。佛教大学文学部、京都造形芸術大学通信洋画・文芸コース、慶応義塾大学文学部通信卒業、放送大学大学院修了など。詩集『ことわり付喪神』七月堂・令和3年刊

## 作品公募の概要

田中眞由美

日本詩人クラブは、日本全国の幅広い方々と作品公募をとおして連携し、詩文化の普及と発展に寄与したいと考え、新しい詩人の発掘を目的に2017年から「新しい詩の声」の公募を始めました。今回で8回目となります。作品募集は日本詩人クラブの会員ではない方（会友は応募対象者です）を対象としています。

応募作品の中から、最優秀賞1篇と優秀賞を2ないし3篇選び、賞状・賞金を贈呈するとともに、日本詩人クラブのホームページと会報「詩界通信」に、公募状況と受賞作品、選考経緯、贈呈式の模様などを掲載し、式の模様はYouTubeでも見られます。

第8回「新しい詩の声」には、北海道から沖縄まで幅広い地域から153名の応募がありました。年齢層も幅広く、最年少は12歳、最高齢は85歳の方でした。応募くださった作品については、受賞者

以外の全員の方に、選考委員5名が分担してコメントを書いてお送りする予定です。お読みいただき、今後の創作活動に活かしていただければと思います。

## 選考経過報告

田中眞由美

今回の選考委員は、秋元炯、田中裕子、田中眞由美（委員長）、根本明、松村信人、の5名。（五十音順）

まず一次選考で、153名の作品から各委員が3月31日(日)を締切日として、メールにて8作品を推薦しました。その結果、予備選考通過作品は次の18作品。

阿部芳久

「病室」

新垣汎子

「黄色いハーベール」

いのうえあき

「象が居る川」

興村俊郎

「黒い蝶」

河波哲平

「脆さについて」

黒田ナオ 「穴」

桑島明大 「手」

k/K 「戦慄き」

小波もゆ 「i 染色体」

木葉揺 「ヨーグルト」

こやけまめ 「二月」

角朋美 「湖の箱」

竹野滴 「いのち」

竹之内稔 「oto ri」

二藤 「独楽」

福富ぶぶ 「否と愛する貴方の明日へ」

水無川渉 「穴だらけの心」

米良天音 「8, 220 km」

(敬称略・五十音順)

このうち、重複して推薦があったのは「oto ri」(2票)、「穴」(2票)、「いのち」(2票)、の3作品でした。この結果をふまえ、この18作品からそれぞれが8作品を選んで4月21日(日)、日本詩人クラブ事務所の最終選考委員会に臨みました。

重複して推薦のあった3作品については予備選考の結果を尊重して残した上で、候補の18作品を一

篇ずつ全員が意見を述べ、更にも残したい作品について理由を述べてから無記名で一人4

作品を選んで投票しました。その結果、「oto ri」「戦慄き」「湖の箱」「いのち」「象が居る川」「病室」「i

染色体」「穴」「ヨーグルト」の9作品が残り、もう一度推したい理由を述べた後、一人4作品を選んで投票しました。結果は「oto ri」(3)「湖の箱」

(5)「象が居る川」(4)「i 染色体」(3)「穴」

(3)となりました。そこで決定するために一番に推薦する作品を2点にして4作品を選んで再投票を行った結果、「湖の箱」8点、「象が居る川」

5点、「穴」4点、「oto ri」4点「i 染色体」3

点となり、角朋美「湖の箱」が最優秀賞に、いのちうえあき「象が居る川」、黒田ナオ「穴」、竹之内稔「oto ri」が優秀賞に決定しました。

今回、次点になった「i 染色体」や「いのち」などの作品には、まさに現代という時代が対峙していかなくはならないテーマが身体性をもって

表出していました。また、それぞれの年代の問題意識も感じられ、心して読ませていただきました。第9回「新しい詩の声」は、11月より応募が始まりますが、ご応募を心よりお待ちしております。

## 選考委員

秋元炯・田中裕子・田中真由美（委員長）・根本明・

松村信人